綴葉 ていよう

'19 3

No.375

あなたが創る生協の書評誌

話題の本棚

御田寺圭著『矛盾社会序説　その「自由」が世界を縛る』

千坂恭二著『歴史からの黙示　アナキズムと革命（増補改訂新版）』

特集／大学的読書事始め　2019

新刊コーナー／私の本棚／洋書を読む

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町　吉田南生協会館２階

Tel：771-6211 ／ E-mail：teiyo@s-coop.net

綴葉HP：http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/

univ. CO-OP 京大生協 綴葉編集委員会

「自由」という残酷さ

矛盾社会序説
その「自由」が世界を縛る

御田寺圭著
イースト・プレス

京大生ならよく聞く言葉であろう、京大は「自由の学風」と言われる。その「自由」に憧れて京大に入った、あるいは京大からその「自由」が最近失われつつある、という言説を聞く。えてして京大生にとって、いや一般的にも「自由」とは望ましいものとして語られる言葉だろう。では、その「自由」を望む姿勢の行き着いた結果出来たのが今の社会なのだとしたら?

「自由」と聞いて思い浮かべるのは何だろうか? 身体の自由・精神の自由・経済活動の自由、「自由権」として挙げられるこれらの例を考えると、「自由」は選択の自由という側面から捉えられる。人は自分の好みに従って意見や職業、交際を選択できる。しかし「人びとがそれぞれ自由を行使した結果として生じる「代償」について省みられたことは少なかったのではないだろうか」。

その「代償」例として本書の冒頭で挙げられるのが「黒くて大きな犬」である。捨てられたペットの殺処分の時に、引き取られず結局処分されるのは「黒くて大きな犬」、つまり小さくも可愛くもない、可哀想だと保護したくならないような存在が多いという。そのような格差について著者は「かわいそうランキング」という言葉を用いて説明する。電通新入女子社員の過労自殺や赤ん坊の熱中症が世間の耳目を集めたのはそれが「保護したくなる存在」であり、その陰には省みられなかった存在が無数にあるのではないか、と著者は指摘する。「自由な社会において「何か・誰かを選ぶ」ということは「選ばれない何か・誰か」がセットになって生じるということを、往々にして人はあまり意識しない」。

例えば就職氷河期世代や非モテの人間。彼らはたまたま不況やモテ要素の欠如という条件下に置かれただけなのに、選択の自由を行使された結果選ばれない存在となり、しかもその結果を「選ばれる努力をしなかったせい」と自己責任にされる。非正規・見た目もそんなに良くない。例えばそんな人間と結婚したいと思う人がいるだろうか。いるかもしれない、ただし「自分以外の誰かだけど」。こうして、選ばれなかった存在は「自分以外の」社会、つまり自分から見えないところへ追いやられる。

現代は「自分がかかわりたくないもの、ごめんこうむりたいものに対する「拒否権」が拡大した時代となったともいえる」。インターネット上では最適化された見たい情報だけが目に入り、見たくないものはフィルターによってふるい落とされる。選ばれなかった存在は見たくない存在へと簡単にシフトする。しかし彼らを省みなかった結果が現在の非婚・少子高齢化や雇用問題などにつながっているのではないか。そう著者は分析する。

「自由」の持つネガティブな一面、それを本書は明快に抉り出している。「自由」を望むと望ましくない歪みをもたらす、この「矛盾」にどう向き合うかと問われているのではないか。（ねこ）

（二九四頁　税込一八三六円　11月刊）

革命の存在論としてのアナキズム

歴史からの黙示
アナキズムと革命（増補改訂新版）
千坂恭二著　航思社

冷戦崩壊とともに世界的にマルクス主義の影響力が衰える一方、アナキズムは活発だ。しかし、現代のアナキズムの主流が世界革命の展望を欠き、いまここにおけるアナーキーや叛乱、相互扶助、自主管理などに専念するのに対して、反国家・反資本主義の世界変革を担う組織運動としてアナキズムを原理的に論じた本書の四五年ぶりの復刊は、現代の読者に新鮮な刺激を感じさせるだろう。

本書の旧版は一九七二年に『映画批評』誌などに掲載された論文がまとめられて翌年上梓された。著者は一九五〇年に生まれ、高校在学中からアナキズム運動に参加し、アナキスト高校生連合や、エス・エル左派（全大阪浪人共闘会議）、アナキスト革命連合などで活動した若きイデオローグ。私家版の小冊子『無政府主義』（七〇年）と論考「反アナキズム論序説」（七五年）が増補された新版では、既存のアナキズムに対する批判が次第に苛烈を極め、全否定的な超克へと発展を遂げる千坂の思想形成が辿れるようになった。

通説として語られてきたアナキズムが内包を欠き、無秩序、秩序破壊というラディカリズムとしてしか規定されないことを論証しつつ、千坂はそれを革命的に捉え返す。「アナキズムは革命の存在論なのであり、革命の根拠、革命の絶対性を論理化する形而上学なのだ」。このテーゼが本書で開陳される国家論や過渡期論、組織論、革命家論、テロリズム論などを貫いている。

国家（存在）の彼方に幻視される、いまだ無に留まるアナーキーによって、国家の存在を否定し尽くすというアナキズム革命の逆説を捉え得たのはバクーニンであった。革命組織の鉄の団結と、過渡期における「見えざる独裁」を認めたバクーニンの思想を継承する千坂は、ウクライナのマフノ運動におけるアルシーノフ綱領主義者、戦前日本の無政府共産党、スペイン内戦における「ドゥルティの友」といったアナキズム史の傍流に位置づけられてきた諸運動の系譜に自らのアナキズムを据えた。この系譜の先端は現在、ファシストを自称する外山恒一の一派を除けば、空位であろうか。

ひときわ評者の興味を引いたのは、ネチャーエフをとりあげて革命家を超人として捉えた論考である。歴史を主体として生きる革命家は、我意によって自らに死刑を宣告し、全てを我意として引き受けることによって個の恣意性と訣別し、人間を超えた存在となる。その姿はいわゆる素朴な無神論者よりも、むしろ絶対的な無へと突破する神秘家、あるいはシュティルナーの「唯一者」に似ている。

随所にみられるファシズムやナチズムにおける革命的契機への着目は、アナルコ・ファシストとも称される著者の現在の立場（近著『思想としてのファシズム』参照）を予感させる。また、あらゆる優れた思想家の初期著作に共通することだが、本書には充分に展開されずに着想に留まる思想の萌芽が散在している。その意味でも本書は読者を創造的な解釈へと誘う「黙示」である。　（霊人）

（三八四頁　税込三八八円　10月刊）

〈特集〉

大学的 読書 事始め 2019

「この門をくぐる者は、すべての希望を捨てよ」。ダンテの『神曲』に登場する「地獄の門」には、そう刻まれているとか。ロダンの有名な彫刻も、苦悩する群像であふれています◆門にも色々あるけれど、私たちがお届けする入門書特集は、皆さんを明るく迎え入れるものでありたい。もっとも、くぐった先が輝ける世界なのか、袋小路なのか、それはわかりません。ですが、もとより学問に王道なし。迷いの森もまた、醍醐味なのかもしれません。（春海）

文学入門

桑原武夫著　岩波新書

近年、人文系への風当たりが厳しい。このような風潮の中で「なぜ文学は人生に必要か」と問うた本書を読むのも、意義のあることだろう。文学は、高尚な趣味をもつ人々だけにとっての慰みでは、決してない。白い地平のうえで黒が踊る。このことに過去どれだけの人が心躍らせてきたか。この喜びは時代に左右されない。人生への強い興味・関心（インタレスト）が文学を支えている。（一七八頁　税込七九九円）

パルムの僧院（上・下）

スタンダール著　生島遼一訳　岩波文庫

フランス文学は傑作が豊富だ。中には描写や説明の長い小説もある。途中で放り出すこともあるだろう。そんな折には本小説を読んでほしい。物語がテンポよく進むからだ。物語の軸は主人公ファブリスと二人の女性（ジーナとクレリア）の恋愛だ。ファブリスは監獄幽閉中、クレリアのおかげで無上の喜びを感じる。自由の身であるときと対照的なのが印象深い。（上　四二六頁　税込七二三円）（モロイ）

地獄の季節

ランボオ著　小林秀雄訳　岩波文庫

科学の興進に伴って物質的に豊かになっていく生活の陰で精神が衰耗してゆくとき、内面に脈打ち蠢く感情はいかに掬い取り、救い出せるのか。本書はこの問いに新たな詩的言語の創作という形で挑んだ、一つの内的格闘の記録である。この試みが失敗に終わりながらもその希望を捨てきれぬまま、現実へ向き合おうとする詩人としての迫りくる懊悩を是非感じてほしい。（一二三頁　税込五六二円）

存在の耐えられない軽さ

ミラン・クンデラ著　千野栄一訳　集英社文庫

ギリシアの哲学者パルメニデスは言った――世界は肯定的なものと否定的なものの両極に分けられる、と。たとえば光と闇、暖かさと寒さ。それでは、重さと軽さでは、どちらが肯定的なのだろうか？――小説の舞台は一九六八年前後のチェコ。どうしようもなく軽い一度きりの人生を生きる、男女の愛憎劇。重さと軽さの目くるめく明滅の果て、そこに現れる生とは。（四〇〇頁　税込八八六円）

（投稿・海／ミセ）

赤頭巾ちゃん気をつけて

庄司薫著
新潮文庫

ゲバ棒にフリーセックス、世の中まるで踊らにゃ損々の昭和元禄阿波踊り。そんな時代に、ヘルメットも被らず女の子をモノにすることもない、いつもニコニコ優等生の主人公・薫くん。自分の生きる意味を求めてさまよう彼だが、ある日その無意味さに絶望しそうになり……。知性とは、希望とは、愛とは。挫けそうになったとき、きっと「赤頭巾ちゃん」が力をくれる。（一九八頁　税込四九七円）

ノルウェイの森（上・下）

村上春樹著
講談社文庫

今や世界的作家となった村上春樹の、言わずと知れたベストセラーである。孤独に生きる大学生「ワタナベ」が喪失と再生の末に見出した答えとは一体何だったのか。タイトルの由来ともなったビートルズの名曲が、儚い作品世界を美しく彩る。二つの世界観の絶妙な絡み合いに気づいたとき、私たちはこの作品に描かれた本当の愛を見てとることとなるだろう。（上　三〇四頁　税込六〇五円）

（ミセ／八雲）

科学の方法

中谷宇吉郎著
岩波新書

科学とは何か、あなたは考えたことがあるだろうか。例えば、何をもって科学的と呼ぶのか知っているだろうか。科学の基本的な世界観から研究の実際まで、著者・中谷宇吉郎が経験を踏まえて語る本書はこうした問いへの最良の入り口である。半世紀以上前の本であるため、今日ではもう当てはまらない記述もある。それでも、決して古びない一冊だ。

（二一二頁　税込八六四円）

動物と人間の世界認識
――イリュージョンなしに世界は見えない

日高敏隆著　ちくま学芸文庫

愛犬、愛猫は何を見、何を感じているんだろう？　という素直な疑問に、大学で真剣に取り組んでみるのはどうだろう。本書は、環世界とよばれる生物それぞれのもつ外界認識について学ぶための、非常に優れた一冊だ。もし動物にはあんまり興味がなくても、人とは？　という問いを考えるとき、対照としての他種の意識について考えることが役に立つはず。（二〇二頁　税込九〇七円）

（蕨餅／トロ）

すばらしい新世界

オルダス・ハクスリー著
大森望訳　ハヤカワepi文庫

決まった仕事以外はせずに済み、享楽の手段は存分にあり、病気も老いも心配いらず、快適な日々が過ごせる。社会階層は生まれつきだが上の階層は自分よりキツイ仕事をし、下の階層は自分より汚い仕事をする。恵まれた今の境遇こそ幸福だ。そんな世界は幸福なユートピアか、それとも自由のないディストピアか。今だからこそこの本を読み返して考えてほしい。（三八四頁　税込八六四円）

火星年代記

レイ・ブラッドベリ著
小笠原豊樹訳　ハヤカワ文庫SF

本書は『華氏451度』でも知られるレイ・ブラッドベリによる、連作短編で紡がれる火星植民の一大叙事詩だ。異星人とのファーストコンタクトや最終戦争という近未来小説の本懐を行きつつ、人類のあり方をも皮肉をこめて描く、不朽の傑作といって間違いない。大学生活に「沼」は多くあるけれど、本書を皮切りにして、SFの沼にもはまってみませんか。（四一四頁　税込一〇一五円）

（ねこ／トロ）

カラー版　近代絵画史（上・下）増補版

高階秀爾著　中公新書

〈歴史とは、いわば裏返しにされた自己確認の試みである〉。西洋近代の多様な美の混沌に、たしかな筋道を通しながら、著者はいかなる絵も歴史性、つまりわれわれにとっての意味を帯びていることを示す。あなたの好きな作品は、何を語りかけてきますか？　初版から四四年、美術史の正統にして端正な入門書として、最上のものでありつづけている。

（上　二二四頁　税込九〇七円）

地図から読む歴史

足利健亮著　講談社学術文庫

恭仁宮の形、平安京の外周、古代道路の直線性、織田政権の城郭史配置。二〇世紀の京大教養課程にはこれらすべてを守備範囲にした地理学者がいた。歴史でも考古学でも高校までの「地理」でもないエスプリと測地の学は、読者の学問観も揺さぶろう。専門的関心のみならず、京都らしい、関西らしい学問を学びたい人にもオススメの一冊。

（二九六頁　税込一〇三六円）

（春海／投稿・とうこ）

証言水俣病

栗原彬編　岩波新書

日本近代文明の矛盾を象徴する水俣病は文化と知を根底から揺るがしたが、原田正純や石牟礼道子、桑原史成、ユージン・スミス、土本典昭らによる不朽の活動の尽くせぬ源泉となったのは患者たちの生と死にほかならない。ならば今一度耳を傾けよう、遂に水俣病を「のさり（授かりもの）」として受け入れた杉本栄子や、チッソとの直接交渉・闘争に奔走した川本輝夫の証言に。

（二一六頁　税込八四二円）

ルポ 母子避難

消されゆく原発事故被害者

吉田千亜著　岩波新書

デタラメな事故対処と発表を繰り返す政府や東電、御用学者を信用せず、家族・親族や周囲の人々と軋轢を生みながらも、被曝から子を守るためにすべてを捨てて「自主避難」した母親たち。彼女たちの危機的（クリティカル）・批判的な生活にいかに寄り添いつつ学んでいくことができるだろうか。本書は身近に存在するにもかかわらず捉え難い避難母子の姿を克明に記している。

（二二四頁　税込八二一円）

（霊人）

はじめて考えるときのように「わかる」ための哲学的道案内

野矢茂樹著　植田真絵　ＰＨＰ文庫

世に入門書の類多しと言えど、ここまでラディカルな入門書も珍しい。本書は、論理学に関する著作も多い野矢茂樹氏による「考える」への入門書である。そもそも「考える」というのは一体、私たちのどのような行いのことを指しているのだろうか。まるで「はじめて考えるときのように」私たちを不思議な「考える」の世界へと誘う、最良の入門書となっている。

（二二三頁　税込六六九円）

啓蒙の弁証法

マックス・ホルクハイマー、テオドール・アドルノ著　徳永恂訳　岩波文庫

近代の思想的礎ともいうべき啓蒙の概念、それは野蛮との対比により人間の文明化の過程を正当化するものだった。しかし文明化された人間はその先を目指すのではなく文明という状態の中で擬似的野蛮→文明という過程を反復的に再生産する。この啓蒙というパラダイムを現代は乗り越えられたのか、本書は現代にも連なる思想的問題の根本に迫る書物といえる。

（五四九頁　税込一四二六円）

（八雲／ねこ）

無意識の構造

河合隼雄著
中公新書

京大の臨床心理といえば、というのも軽々しいけれど、優れた臨床家であり、同時に優れた文筆家でもあった、河合隼雄による本書は臨床心理の学びの第一歩として間違いない一冊だ。ユング派の無意識という概念の認識に関する知識だけでなく、臨床家としての彼のスタイルの片鱗に触れることもできるだろう。心理学に関心があれば、一度手に取ってほしい。（二一三頁　税込七五六円）

アメリカ講義
新たな千年紀のための六つのメモ

イタロ・カルヴィーノ著　米川良夫・和田忠彦訳　岩波文庫

本書は、カルヴィーノが一九八五年から一年間、ハーヴァード大学で行う予定だった「ノートン詩学講義」の遺稿を元にしている。「来るべき千年紀においてもなお途絶えずに展開し続けて欲しい」項目を、著者は五つ挙げている。軽さ、速さ、正確さ、視覚性、多様性である。この五要素にくわえて、巻末付録の補遺を読めば、これからの文学への理解がより深まるだろう。（一九三頁　税込九〇七円）

（トロ／モロイ）

新版 きけわだつみのこえ

日本戦没学生記念会編
岩波文庫

本書の題名を聞いたことがある読者も、実際に手にした人は少ないだろう。当時二〇歳過ぎの学生が、戦地に赴く時に書いた手記。死を前にしたその言葉は、確かな温度をもって私たちに訴えてくる。一読して多くの学生が文学や詩、数学や哲学に何かを求めているのが分かる。「数学への愛着」「もっと本を読みたい」――何故学問が必要なのか、少しわかった気がした。（五二一頁　一〇九一円）

死霊（全三巻）

埴谷雄高著
講談社文芸文庫

退屈な日常の中で文学に癒しを求めるのではなく、狂気を求める読者もいるだろう。埴谷雄高が生涯を捧げて書いたこの文学を読めば、読後再び日常に帰ることはなく、あなたは日常から浮いた人間になっている。昭和一〇年代の東京を舞台とした文学の狂想曲。この世界に馴染めない人こそより強い狂気を浴びて、自分自身を変革してみては。

（四三二頁　税込一五一二円）

（きもの）

帝国大学
――近代日本のエリート育成装置

天野郁夫著　中公新書

帝国大学は過去のものではなく、現在にもしっかりその足跡を残している。例えば、旧帝大卒業者しか入会できない「学士会」や、国が帝大にしか認可しなかった研究の向上のため設けられた「講座制」がある。両者ともにかたちを変えつつ、現在の旧帝大まで他と違うというエリート意識として刻まれている。本書には、そのような旧帝大の歩みが客観的に描かれている。（二七八頁　税込九二九円）

橋ものがたり

藤沢周平著
新潮文庫

こな雪、つぶ雪、わた雪、みず雪、かた雪、ざらめ雪、こおり雪。太宰治『津軽』の冒頭に記された雪の種類だ。名詞は時にそれ自体で心に響く。藤沢周平の本作の舞台もまた然り。萬年橋、思案橋、親爺橋、永代橋、猿江橋、駒止橋……。江戸の往来での出逢いと別れの情景を縁取った一〇の短篇は、通り雨のように余韻深い。いつの世も、男と女は男と女なのだ。（三八九頁　税込六八〇円）

（ういろう／春海）

新版　日本語の作文技術
本多勝一著
朝日文庫

英語を学んできた人は多い。反面、「日本人が普段使っている日本語を勉強することは稀だ」。そう、日本語の作文技術を学んでいないと、このような文章を書いてしまう。淀みなく読めるようにするには、「日本人が」と「普段」の間にテンを打つか、「日本人が」を「日本語を」の後に移さねばならない。こうした技術を学べる本書。日本語を書く者みなに一読を薦めたい。（三二八頁　税込六四八円）

日英語表現辞典
最所フミ著
ちくま学芸文庫

翻訳とは隔靴掻痒、何年も前から学んできたはずの英語でさえ、「よろしくお願いします」を上手く言えないから大変である。語彙を機械的に訳すだけではいけない、とわかっていても自分では表せないニュアンスを本書は実例を挙げて丹念に説明してくれる。訳せなくてカッカする、そんな時にもどかしさを減らす孫の手にでも本書を使って頂ければ幸いである。（六三五頁　税込一六二〇円）

（ミセ／ねこ）

魔女の宅急便（全6巻）
角野栄子著
福音館文庫

児童文学のノーベル賞と呼ばれる国際アンデルセン賞を受賞した角野栄子の代表作『魔女の宅急便』。ジブリで知っている読者も、原作がキキととんぼの恋の行方や、双子の親になったキキの戸惑いまで描かれているとは知らないだろう。親離れした一人の少女が苦闘しながら成長していく姿は、実家離れした学生の時期に読むと一層気持ちが分かるかもしれない。（第一巻　二七二頁　税込七五六円）

パイドロス
プラトン著　藤沢令夫訳
岩波文庫

「自分を恋している者よりも恋していない者にこそ、身を任せるべきだ」。そんな命題の判定にあたり、ソクラテスは弁論術の正しき手順として、まず「恋」に定義を与える。エロースとは放埒な肉欲ではなく、真実在を目指す最善の狂気であると。そして、知を求め美を愛し恋に生きる魂のみが輪廻を免れると説く。古代の真夏の一日の対話篇は、時を超えて谺する。（二五八頁　税込八四二円）

（きもの／春海）

国家と革命
レーニン著　角田安正訳
講談社学術文庫

国家を階級支配の機関と看破し、暴力革命によってブルジョア国家を廃絶してプロレタリア独裁を通じてプロレタリア国家を死滅に至らせる革命論を築いた本書は、マルクスの偶像化への批判に始まり、マルクス主義の卑俗化への批判に終わる。資本制とブルジョア国家が跳梁し、マルクスの偶像化とマルクス主義の卑俗化が跋扈するかぎり革命的であり続ける名著。（二九六頁　税込一二四二円）

コーラン（上中下）
井筒俊彦訳
岩波文庫

コーランとは神の言葉である。キリスト教に類比すれば、聖書よりもむしろロゴスそのものであるキリストに対応する、非被造的な永遠の存在である。したがってコーランの翻訳はもはやコーランではなく、人間による意味内容の解釈にすぎない。とはいえ雄々しい詩情を湛えた井筒訳は「読誦されるもの」という原義をもつコーランの性質を見事に伝えている。（上　三〇六頁　税込一〇四八円）

（霊人）

データ分析の力
因果関係に迫る思考法
伊藤公一朗著　光文社新書

統計データを読むとき、相関と因果関係を混同してはならないという話はよく耳にする。しかし、この区別に失敗している例は数多く、怪しい言説の温床となっている。データから因果関係を論証する方法を紹介する本書は、そのような主張を「話半分に」聞けるようにしてくれる一冊である。事例の紹介が豊富で数式もなく、読み物としても面白い。

（二八四頁　税込八四二円）

数学的に考える
問題発見と分析の技法
キース・デブリン著　冨永星訳　ちくま学芸文庫

入試に合格したから数学はもういいや、というあなたにおすすめの一冊が本書である。数学とは計算が全てだと思ってはいないだろうか。しかし実は、数学で重要なのは考え方である。そして、それは今日の世界を生きていくうえで非常に有用なのだ。こうした観点から書かれた大学数学の入門書である本書は、文理を問わずよい手引きとなるはずだ。

（二一八頁　税込一〇八〇円）

（蕨餅）

喜嶋先生の静かな世界
The Silent World of Dr. Kishima
森博嗣著　講談社文庫

数多くの推理小説で知られる森博嗣の自伝的小説である。ひょんなことから出会った喜嶋先生に強い影響を受け、やがて学問の道を志すこととなる主人公の姿には、「大学での学び」について、実に多くのことを考えさせられる。登場人物たちの人間ドラマだけでなく、度々登場する珠玉の「喜嶋先生語録」までをも味わいながら、読み進めてみたいものである。

（三八三頁　税込七四五円）

春の夢
宮本輝著
文春文庫

大学生・井領哲之は自室で柱に釘で打ちつけられた蜥蜴を飼っている。哲之はその生死の境にいる蜥蜴を生きている意味そのものだと思っている。我々はいずれ死ぬ、人間もその釘で打ちつけられている蜥蜴と同様、生死の境にいるからだ。しかし、蜥蜴は死を恐れずにただ生きている。哲之自身と周りに生きる人々と重ねられながら。生きる全てを肯定する一冊。

（四〇八頁　税込七三四円）

（八雲／ういろう）

聖なる天蓋
神聖世界の社会学
ピーター・L・バーガー著　薗田稔訳　ちくま学芸文庫

近年、イスラームなどの宗教がよく話題になる。その時に多いのが日本は多神教・西洋は一神教、というような宗教同士の比較の話である。しかし、宗教と社会の存立との関わりという根源的な事柄にはあまり触れられない。そこを説いてくれる数少ない書物の一つが本書である。宗教を通して人の営み自体を見つめる本書の視点を見過ごしてはならないだろう。

（三四九頁　税込一二九六円）

老子
蜂屋邦夫訳注
岩波文庫

現代は我々に次々と能動性を強いる時代だ。大学に入学した途端に様々な手続きを課せられ、すぐに就活の準備が始まり、卒業していく。しかし、老子はそうした能動性を否定した「無為」に重点を置く。「無為にして而も為さざる無し」、無為であることによって全てを為すことができるという逆説的な能動性である。本書が現代に対する一種の清涼剤となれば幸いである。（四五三頁　税込一二二〇円）

（ねこ／ういろう）

新刊コーナー

ラーメンの誕生

岡田哲著
ちくま学芸文庫

ラーメンは元々が中国原産であるが、いまや世界に拡散している「ラーメン」を誕生させたのは日本であるというのが著者の主張である。では、そのラーメンが日本から世界に広まったのはなぜだろうか。

著者は放送大学で教鞭をふるった食文化史研究家であり、本書ではラーメンが生まれてから世界に広まった歴史を辿っている。そもそもラーメンは中国から輸入されたものであるが、日本ではそこにスープのアレンジを加えるというかたちで輸入された。つまり、味を和風にしたのである。そうして太平洋戦争後、日本のあらゆる地域で様々な味を作り出し、爆発的に広まっていった。そして、世界中にも日本の輸入の仕方と同様の形式で広まった。つまり、中国原産のラーメンという型だけを輸入し、そこにその国独自のアレンジを許すことでオリジナルなラーメンを開発していくということである。日本はラーメンに無限の味とその国の味へとすんなり順応する可能性を与えたのである。こうしてラーメンは日本人の創意工夫によって一中華料理から世界の「ラーメン」となったのである。

前述したように、ラーメンのスープにはそれぞれの個性がつまっている。そこにはこれまで味の探究をしてきた人々の歴史がつまっているのだ。本書を読んだ後にラーメンのスープをすすったとき、いつもより味に深みを感じることは間違いない。（いいろう）

（二四二頁　税込一〇八〇円　1月刊）

入れ子の水は月に轢かれ

オーガニックゆうき著
早川書房

本作は那覇の水上商店街で起こった殺人事件をめぐる推理小説だが、自分の人生に悩む方や、ステレオタイプではないリアルな沖縄に触れてみたい方にもお勧めの一冊である。

主人公岡本駿は、ある理由から別人として生きざるを得ない。その実存の不安を、舞台となる水上商店街が体現している。水上商店街は、暗渠の上に作られており、陸上でもあり、水上でもある両義的存在なのだ。しかし、駿は、犯人と対決する中で過去と向き合い、ラストにある決断をする。それは実存的苦悩のある読者には響くものがあるだろう。

序盤で犯人が誰か大体推測がついてしまう、一部の登場人物の造形がやや平板で深みに欠ける、などのきらいもあるが、本作にはそれらを補って余りある素晴らしさがある。CIAの暗躍など沖縄の戦後史の闇とそれに翻弄される人々が織り成す、映画のようなヴィヴィッドで練られた骨太のストーリー。ステレオタイプではない沖縄のリアルを体感できる。また、「静かな水上店舗に星空が覗いていた。漆黒の布に砂をちりばめたようだった」という表現のように情景描写は文学的でイメージ豊かである。沖縄方言を交えた会話は活き活きとしていて、情景描写と相俟ってその場に居るかのような臨場感が味わえる。

京大法学部休学中の作者は、本作により、審査員の激賞を受け、アガサ・クリスティー賞を受賞・デビューしたが、直に大作家となるだろう。ぜひ、あなたもその鮮烈なデビューの目撃者となってほしい。（投稿・行人）

（三九三頁　税込一九四四円　11月刊）

帰れない山
パオロ・コニェッティ著　関口英子訳
新潮クレスト・ブックス

表紙の美しさに惹かれて本書を購入し、文章の美しさに魅せられて読書に没頭していた。ページを捲るたびに北イタリアの山麓の世界へ入り込み、読み終わった後、印象派のような表紙の風景が別の景色のように見えた。寂しさと懐かしさが湧く故郷のように。

舞台は北イタリアの山麓グラーナ村。父親に連れられて山を登る内向的な主人公ピエトロと、山を遊び場にする奔放な少年ブルーノ。二人は異なる性格だからこそ互いに惹かれあい、親友と呼べる友情を築いていた。

少年から大人になる中で、二人は別々の人生を歩んでいく。どこに行っても居場所を見出せないピエトロは世界中の山を登り、生まれ育った村から出ることのないブルーノは繰り返し故郷の山を登っていた。父の死を切っ掛けに二人は再会し、電気も水道もない山小屋の中で、水車の音を聞きながら互いの思い出と未来を語り合っていく。

本書の登場人物はみな寡黙だ。多くを語らずに視線や動作で、傷つきやすい相手に意味を伝えようとする。そうした沈黙や配慮の裏側で、もう一人の主人公ともいえる「山」の輪郭が浮かび上がってくる。山は何も語らない。ただただ人々の思い出に寄り添い、居場所を与え、時に命まで奪っていく。

山と向き合うことでしか得られない喜びがあるように、山を通じてしか得られない孤独もある。年月を帯びても変わらずに聳え立つアルプスのように、時代を超えても古びない物語が本書には宿っている。　（きもの）

（二七一頁　税込三二一四円　10月刊）

見知らぬものと出会う
ファースト・コンタクトの相互行為論
木村大治著　東京大学出版会

「ああ、面白かったら何でもええです」。学生時代、指導教員のそんな一言に人類学研究の迷いを振り払われたという著者は、本学の教授として学際的な研究をつづけている。

宇宙人との出会い方を扱った本書も、なるほど面白い一冊だ。それは、想像できないことを想像することにほかならない。この根本的な矛盾を直視する第Ⅰ部では、宇宙人との邂逅という特殊な出来事を、他者理解一般の問題と接続させることで、似非科学に陥らない説得的な論述を可能にしている。

第Ⅱ部では、さらなる論点に向き合う。すなわち、宇宙人に出会ったとして、彼らとコミュニケーションをとるための共通のコードはありうるのだろうか……？　情報理論や言語論、霊長類学や社会学といったさまざまの知見を駆使しながら提示されるのは、コードなき相互行為というありようである。

もっとも、コミュニケーションのためには相手への信頼がどうしても必要となる。第Ⅲ部では、レムの『ソラリス』や筒井康隆の『最悪の接触（ワースト・コンタクト）』など、ファースト・コンタクトSFの分析を通して、そのほのめきが探られる。総じて、文学の想像力を科学の論理と独自の造語で捌いてゆく手並みは鮮やかだ。

かつて著者が「あなたにとって『宇宙人的なもの』は何か」と学生に尋ねた際、「妹」や「友人」との答えも多かったという。本書の面白味は一抹の戦慄と抱き合わせだ。接触、それは遠い未来の話ではない。わたしたちは、すでに彼らに出会っている。　（春海）

（三〇四頁　税込三〇二四円　9月刊）

フェイクニュースを科学する

笹原和俊著
化学同人

ポスト真実の時代が来たと言われるようになってからしばらく経つ。確かに、インターネット上で、真偽不明の情報を目にしない日はない。あるニュースがデマだという話がデマであることも珍しくない。一体なぜ、このような状況になってしまったのだろうか。

こうした虚偽の情報、すなわちフェイクニュースの科学を紹介するのが本書である。人間の心理的特性に関する知見や、社会ネットワークの性質に関する研究成果をもとに、フェイクニュースが蔓延する原因を解明してゆく。紹介される知見はどれも興味深く、また語り口は非常に平易である。本書を通じて明らかになるのは次の点だろう。嘘が人口に膾炙する原因は、話の出来や媒介者のリテラシーの欠如によるものではない。人間の認知の特性と情報の流通形態そのものによるのである。見たいものしか見ない人間が、インターネットという見たいものしか見ることのできない環境に置かれた結果、怪しい情報が大いに流通してしまう。この罠から逃れることは難しい。例えば、検索したところで情報の検証ができるとは限らない。検索結果も「最適化」されており、あなたの興味関心から大きく離れた結果は表示されないのだ。本書では解決策の例も紹介されるが、それよりもこうした仕組みを知るほうが有効に思える。

本書は総じて役に立つのみならず、読み物としても面白い。日ごろインターネットで情報を得ているなら、だれでも一読しておくべき一冊だ。

（一九二頁　税込一六二〇円　12月刊）

（蕨餅）

サカナとヤクザ
暴力団の巨大資金源「密漁ビジネス」を追う

鈴木智彦著　小学館

年末年始、大きな賑わいを見せる卸売市場を毎年マスメディアが報道する。日頃はあまり手に取られることのない高級魚介類、たとえばおせちの定番アワビなどが競い合うように売れていくのがこの時期だ。大きなカネの動く高級魚介類の取り引きの背後には、魚食大国日本の港町に長く巣くってきた密漁の文化とそれを牛耳る裏社会の影がある。その実態を取材と調査によって明らかにしようと試みたのが本書だ。

日本の台所と長く呼ばれてきた東京築地の市場にも、密漁された魚介類が並ぶ。多種多様な職業から流れ着いてきた男たち女たち、跋扈する高利貸の中に筆者は飛び込み、密漁された魚介類が取引されているという証拠を探す。裏社会からの信用なしには書けない内容だから、写真もなく詳細に触れられない部分が多いことも察せられるが、歴史的にも裏社会とのつながりの強い市場でのルポは、はみ出し者に遺された市場のおおらかさと底知れない闇を想像させるのに十分であり、裏稼業の温床としての漁業の姿を反映している。

昨年は、夏の風物詩ウナギが絶滅の危機にあり、僕たちの食べてきたウナギの多くが実は国外での動きも含む違法なルートを通ってきているかもしれないことがマスメディアでも報道された。しかし本書を読めば、日本の豊かな魚食文化が、法の外でうごめく人々によって支えられているという不気味な事実に対して、より重要な実感を得ることが出来るかもしれない。

（三一九頁　税込一七二八円　10月刊）

（トロ）

功利主義とは何か

カタジナ・デ・ラザリ＝ラデク、ピーター・シンガー著
森村進、森村たまき訳　岩波書店

各分野の入門書として定評のある、オックスフォード大学出版局「ベリー・ショート・イントロダクション」シリーズから「功利主義」の邦訳が遂に出版されることとなった。著者には、動物倫理についての議論で世界的に著名な倫理学者ピーター・シンガーが名を連ね、また、今回翻訳を担当した森村進は昨年、『幸福とは何か』（ちくまプリマー新書）で、〈思考実験から考える幸福論〉という一風変わったテーマから話題を呼んだことも記憶に新しい。

さて、本書はまさに表題の通り、「功利主義とは何か」という問いに様々な角度から迫っていく入門書である。「功利主義」と聞いて、「最大多数の最大幸福」の追求ということを連想した人も多いだろう。確かにそれは功利主義の出発点となった重要なテーマである。しかし本書は、そういった学説の教科書的解説にとどまらず、現在世界で功利主義がどのように実践されているのか、ということにまで言及する。たとえば、私たちの多くは普段何気なく動物の肉を食べ、皮革製品を利用している。しかし「最大多数の最大幸福」ということを考えるならば、その犠牲となる動物たちの多くの「不幸」についても、考慮しなければならないのではないだろうか。

功利主義の理論だけでなく、その応用的な内容にまで言及する本書は、入門書としてかなり充実したものとなっている。多くの人が本書の内容理解に「快」を見出し、その全体としての幸福量が増大することを願ってやまない。

（一八四頁　税込二二六八円　11月刊）

（八雲）

不平等の再検討
――潜在能力と自由

アマルティア・セン著
池本幸生他訳　岩波現代文庫

我々の民主主義社会においては、市民の平等というのは社会の同意事項となっているが、実際は、平等などというものは実現されていないというのは多くの者が実感したことのあるところだろう。このように我々の実感として存在している不平等も、一定の主張が現れるとき、それは覆い隠されてしまう。この平等の問題について、ノーベル経済学賞受賞者センは、平等についてのどんな主張も何かしらの重視される価値の平等を求めているのであり、それ以外の価値については不平等を許容しているのだという。例えば、政府による経済的な平等を求める主張は、当該側面については平等を守る一方、個人の自由の平等を犠牲にせざるを得なくなる。

では政策によって不平等を是正しようとするとき、不平等を見逃さないアプローチとはどのようなものだろうか。センは、ある人の実現可能性の集合である潜在能力という概念を活用して乗り越えようとする。例えば女性は男性にはない社会的制限があり、また障害者には健常者よりもできることに制限があることから、潜在能力はより小さくなる。所得のみに注目したらこの二者に差はないと解釈できる場合もあるが、潜在能力アプローチを取ることによって、二者にそれぞれ差を見出し、より適切な政策を取ることができよう。

人々の均質性ではなく多様性を前提とした考察に本書の特徴があるが、多様性を認める社会には、潜在能力を提示する本書の知見は大いに役立ちうるのではないか。**（投稿・英哲）**

（四三二頁　税込一五九八円　10月刊）

文学作品と映画

自由な時間が目の前に広がっている春休み、たまには映画でも観てみるのはいかがだろうか？　ただしここは書評誌『**綴葉**』、映画だけを扱うわけにはいかないので、文学作品とそれを題材にした映画をいくつか紹介したい。

『**ヴェニスに死す**』（**トーマス・マン／ヴィスコンティ**）

トーマス・マンの審美性の極致とでも言うべき『**ヴェニスに死す**』（岩波文庫）。その名のとおりイタリアのヴェニスを舞台にした、ある年老いた男の愛と死の物語である。国民的作家アッシェンバッハの作品は、年を経るにつれて形式的なものと化していた。ふと旅情に誘われてヴェニスに向かい、そこで美少年タジオに一目で恋に落ちる。恋の情熱に囚われた彼は、来る日も来る日もタジオの後をつけてヴェニスの街をさまよう。そのとき、ヴェニスでは疫病が流行りはじめていたにもかかわらず……。ヴィスコンティの映画『**ベニスに死す**』（イタリア・フランス、一九七一年）は、原作の退廃的でエロティックな雰囲気をいや増すことに成功している。なんといっても、天使のようでありながら多少毒々しい美しさのタジオが素晴らしい。恋ゆえの必死さが滑稽に映じるアッシェンバッハ役の俳優が、この自伝的小説の作者マンに似ているのも面白い。

『**ピアニスト**』（**イェリネク／ハネケ**）

オーストリアの女性作家イェリネクの小説『**ピアニスト**』（鳥影社）。ピアノ教師のエリカは母親と二人暮らし。エリカを支配する母と母に服従するエリカ、二人は共依存的に一つの閉じた世界を形づくっている。そこに現れたのは、エリカを恋する若者ヴァルター。彼女はあるとき手紙でみずからの被虐趣味を告白し、どう支配されたいかをヴァルターに命じるが……。カンヌ映画祭で賞をとったハネケの『**ピアニスト**』（フランス、二〇〇一年）では、エリカの表情が印象的だ。あるときは個室でポルノ映画を、あるときは嫉妬交じりに自分の教え子を、無表情にじっと見つめるエリカ。観客からすれば彼女に見つめられることになる。一方的に見つめられたり感情をぶつけられたりする気持ち悪さ、それこそこの作品の気持ち悪さの精髄ではないだろうか。

『**ソラリス**』（**スタニスワフ・レム／タルコフスキー**）

米ソ宇宙開発競争のさなか、ポーランドの作家スタニスワフ・レムによって発表された『**ソラリス**』（ハヤカワSF文庫）。太陽系外の惑星ソラリスは意思をもつ海に覆われている。調査のため派遣された心理学者ケルヴィンは、海によって引き起こされる不可解な現象に出くわす――自殺したはずの恋人が、目の前に現れたのだ。人知を超えたものを前にして、人間はあまりに無力だ。レムは、地球の拡張としての宇宙開発や〈鏡〉を求める人間の心性からの脱出を試みている。対してタルコフスキーの『**惑星ソラリス**』（ソ連、一九七二年）は、内なるものに還ってゆくことを主題としている。原作とは違って故郷の家の場面から物語が始まり、幼年時代の回想が繰り返される。故郷の雪原、うら若き頃の母、流れ落ちる水の音……。映画化に際しての結末の改変について、レムとタルコフスキーは大喧嘩をしたという。書き割りは同じでも、作り手によって作品は様変わりする。是非どちらも楽しんでほしい。　（**ミセ**）

外国語学習、ときどき洋書

この春から大学に入学した方は、新たに第二外国語を学ぶ必要があるだろう。何語を選択しようか迷ったり、面倒だと感じたりしている人もいるかもしれない。単位取得を優先するなら、たしかに、外国語学習は煩わしいこと、この上ない。しかし、外国語を勉強することで、世界に対する自分のものの見方が変わりうるとしたら、どうだろう。素敵なことに思えてこないだろうか。何よりも外国語の勉強は楽しい。今までわからなかったことがわかるようになる、そんな感覚をいつでも味わえるからだ。

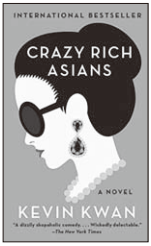
大切なのは「やめないこと」

とはいえ、外国語の勉強は楽しいことばかりではない。思ったように上達しないことも度々ある。そのとき大事なのは外国語の習得を諦めないことだ。これは、黒田龍之介著『**外国語の水曜日　学習法としての言語学入門**』（現代書館）において、繰り返し語られている。たとえば「外国語学習にとって最も大切なこと」の項には、次のように書かれている。「外国語学習にとって最も大切なこと、それはやめないことである。／「続けること」なんていう積極的なものではない。とにかくやめない。諦め悪く、いつまでたってもその外国語と付き合っていこうという、潔くない未練たらしい態度が必要なのである」。別の項にも「しばらく辛抱して続けていれば、必ず何かを得ることができるはずだ。そう、しつこくやることが大切だ。特別な才能はいらない。[…] 大切なのは気を楽にすること。生半可な知識も、語学だったらなかなか楽しい。挨拶ぐらいしか覚えられないとしても、べつに人を傷つけることにはなるまい。これがたとえばスキーとか車の運転だったら、命にかかわってくるのでそうはいかない。語学は有り難い」とある。外国語を勉強していてモチベーションが保ちづらくなってきたとき、本書を読んでリフレッシュしてみては。

外国語学習の目標

外国語を勉強するうえで大きなモチベーションの一つになるのは、その国のことばで書かれた本を読むことである。ここでは英語の本を紹介したい。

洋書の第一歩目としては、Judy Blumeの*fudge series*（たとえば***Fudge-a-Mania***, Puffin books）がオススメだ。アメリカの子どもが過ごす日常を面白おかしく書いてあるからだ。単純に読み物としても興味深い。このシリーズが簡単だと思えるようなら、Keyes著、***Flowers for Algernon***, Harcourtを手にとってみるとよいだろう。手術によって知能が飛躍的に高まったチャーリー・ゴードンは、知的障害のあったときにはできなかった、感情面での体験や経験を重ねる。チャーリーと同じ脳手術を受けた知性を持つネズミ、アルジャーノンと主人公をめぐる物語だ。内容以外にも、スペルや文章そのものに注目してみるのも愉しい。ここでもう一冊挙げるとすれば、注目を浴びる作家Kevin Kwanによる***Crazy Rich Asians***, Anchor Booksだ。本書は邦訳が出版され、映画化もされている。シンガポールの王族のような大富豪と、気鋭の中国系アメリカ人教授との間の恋愛葛藤劇を描く。最終盤のどんでん返しに注目だ。



（モロイ）

編集後記

どうもトロです。今月をもちまして、綴葉の編集や書評の執筆から離れることになりました。社会の端っこになんとか滑り込むことができたので、来年度からはスーツを着こんで時間をお金に換える毎日になりそうです。

同時に京都を離れることになるのですが、初めてこの土地を訪れたとき、親元を離れる解放感と田舎者特有のキョウトに対する幻想で胸がいっぱいだったことを思い出します。結局のところ、思い出すのは出会った人や集団のことばかりで、何か京都にいたからこその事ができたようには思えないのですが。

そのなかでも綴葉は、院生になってしまった大人しかおらず、僕のような異物も混じってはいたものの、皆が教養人のタマゴという他にないコミュニティでした。一段知性が劣る感じの僕の書評を皆さんがどう思っていたかと考えると背筋が冷える思いですが、自分に書けるものは書いてきたと思っています。

最後に、綴葉に関わっていた間、僕の書評を読んでいただいた読者の皆様と、業務で関わった多くの方に感謝いたします。僕は最後まで未熟で情けない限りですが、今後もぜひ、綴葉をよろしくお願いします。　（トロ）

当てよう！図書カード

突然ですがこの冬はインドに行ってヨガを習っていました。ヨガが誕生した地といえばリシュケシュ。肉もお酒も禁止されているこの聖地には今も世界中から人が訪れています。さてここで問題、リシュケシュを訪れた有名なロックバンドといえば何でしょうか。

1. The Beatles　2. The Rolling Stones
3. Oasis　4. Blur

（きもの）

《応募方法》読者カードに答えを書いて生協のひとことポストに入れてください（または e-mail:teiyo@s-coop.net）。正解者の中から抽選で 5 名の方に図書カードを進呈いたします。締切りは 4 月 15 日です。

11 月号の解答

11 月号「20 世紀フランスの哲学者アランの著作でないものは？」の解答は、3.『恋愛論』でした。応募者 18 名中 17 名の方が正解でした。たくさんのご応募ありがとうございました。図書カードの当選者は、パスカルさん、宵さん、あっきーさん、湖底の蟹さん、gori さん（順不同）です。おめでとうございます。　（モロイ）

読者からひとこと

○なかなかまとまった時間を読書に使えないので、『綴葉』を読み物として楽しんでいます。修論、がんばりましょう。　（人環・ぽーろ）

――いつもご愛読いただきありがとうございます。修士論文の執筆、大変お疲れ様でした。『綴葉』でも、修論を書かなければならない編集委員が毎年いまして、この季節は一年で最も忙しい時期です。

○教員の選書コーナーがあっても面白いかも。　（農・山人）

――昔々は教員が書評することもあったのですが、いつのころからか途絶えてしまったようです。確かに、ちょっと読んでみたいですよね。

○質問なのですが、「当てよう！図書カード」の図書カードは郵送されるのでしょうか。　（農・オーシャンタートル）

――「当てよう！図書カード」の景品は郵送でお届けいたします。担当者が発送するまで、しばらくお待ちください。

『綴葉』では現在、書評の投稿・編集委員の募集を行っています。ぜひ、お気軽にお問い合わせください。　（蕨餅）